

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.127

2023.12.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.127 目次

施設紹介ー須坂市動物園	2-3
施設紹介ー飯田市立動物園	4-5
センカク系アホウドリの救護	6-9
アホウドリ(オキノタユウ)の救護報告	10
閉経する鯨類・シャチ	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

須坂市動物園

須坂市動物園 獣医師 笹田 和 樹

【須坂市動物園について】

須坂市動物園は 1962 年 10 月 1 日に開園し、昨年 60 周年を迎えました。さくら名所 100 選・日本の名松 100 選にも選ばれた臥竜公園内にある小さな動物園です。ベンガルトラやカピバラ、フンボルトペンギン、トナカイなど、現在は約 45 種・230 点の動物を展示しています。市民の憩いの場として生物への興味を深め、見聞を広めていただけるように、毎月のイベントや動物についてのガイドなど様々な活動を行っております。現在、絶滅危惧種であるニホンイヌワシの繁殖にも取り組んでおり、ガバメントクラウドファンディングを利用した新獣舎の建設も予定しています。



動物園 正面入り口



ニホンイヌワシ

【傷病鳥獣の保護状況】

	鳥類		哺乳類		合計	
	保護数	放野数	保護数	放野数	保護数	放野数
2014 年度	2	0	0	0	2	0
2015 年度	3	2	0	0	3	2
2016 年度	3	0	3	0	6	0
2017 年度	1	0	5	4	6	4
2018 年度	1	1	0	0	1	1
2019 年度	3	0	0	0	3	0
2020 年度	1	0	0	0	1	0
2021 年度	0	0	0	0	0	0
2022 年度	0	0	0	0	0	0
2023 年度	0	0	1	0	1	0

須坂市動物園では、長野県から野生傷病鳥獣救護事業の委託を受けて傷病鳥獣の救護を行っています。2017年には県の保護対象種が明確化されたこともあり、近年では保護件数は減少傾向にあります。また、高病原性鳥インフルエンザへの防疫対策として、鳥インフルエンザの流行期には、野生鳥獣の受け入れを中止するようになったことも一因かもしれません。

2014年度から2023年度までの10年間で、保護された野生鳥獣数は表のとおりです。当園に救護を依頼される鳥獣は須坂市内だけでなく、県内のほかの市町村で保護された動物もあります。保護される動物種としては哺乳類よりも鳥類が多く、近年は猛禽類の保護が多い傾向にあります。鳥類における保護理由は、外傷によるものがほとんどです。

できるかぎり放野を前提に治療やリハビリを行います。放野が困難と考えられた場合は、動物園で終生飼育をしています。こうした動物は一般向けに展示もしており、野生動物の生態や人間と野生動物の関係性について考えてもらうきっかけづくりなど、教育面での活躍をしてもらっています。



トビ



ニホンカモシカ



コミミズク

終生飼育となった保護動物の例。カモシカは右前肢を断脚しており、患部保護のためにクッションをいれた保護着を着用していた。

【現状の問題点や課題】

現在は放野した動物について追跡調査を行ったことがないため、放野の判断が正しかったのか評価することが難しい状態です。そうした調査を行えると、野生復帰にもより貢献できるのではと考えています。また、近年は SNS などの普及により、多くの方にさまざまな情報が伝わるようになりました。終生飼育となった野生動物を展示していくうえでは、保護された経緯や野生動物であるということをしっかりと伝えていき、観覧者に野生動物と愛玩動物の認識が誤って伝わることをないように、気を付けなければいけないと感じています。

飯田市立動物園

(株)Rethink 事務局長 伊 藤 崇

〒395-0046 長野県飯田市扇町 33

TEL/FAX0265-22-0416

【飯田市立動物園について】

飯田市街のほぼ中心地で、りんご並木の南側に位置し、はるかに天竜川や南アルプスを一望のうちに眺めることができる、長野県南端の伊那谷に設置された施設です。

飯田市は、昭和 22 年の飯田大火によって市街地の大半を焼失し、火災復興を目指す都市計画で扇町公園を作りました。そして、園内にサルや小鳥などを飼っていたのが動物園の前身となり、昭和 28 年 5 月 5 日、飯田市立動物園として開園しました。

昭和 54 年、当地域が大規模地震対策特別措置法強化指定地区とされたのを機に、昭和 56 年から昭和 62 年の 6 年の間に、整備計画の中で周囲の環境、立地条件を踏まえ、小動物の展示を主体とした“猛獣のいない動物園”の改修が進みました。この改修を受け、それまで市民から親しまれていたライオン、ヒグマ、ヒマラヤグマなどが、昭和 57 年から 59 年にかけて住み慣れた飯田の獣舎を後にしています。

平成 23 年から平成 26 年には、第 3 期再整備工事が実施され、フンボルトペンギン舎、小獣舎、コンドル舎、小動物エリア、シカ・カモシカ舎がリニューアルされました。一部の獣舎については、野生動物生息地の環境を再現し、動物が本来の行動を発揮できるように工夫した“生息環境展示”をコンセプトに、リニューアルが行われています。

なお、飯田市立動物園は市営施設であり、管理運営業務は(株)Rethink が実施しています。



【正 門】



【タヌキ】

【救護施設の紹介】

動物園内にあります獣医室が、まっさきに傷病鳥獣を収容する施設です。個体の様子によりゲージや段ボールに収容し、獣医師の診療を受け、必要な措置を行います。その後、個体の回復度合いによりリハビリ室に移動し、野生復帰が可能か見極め、準備が整った個体は放野します。

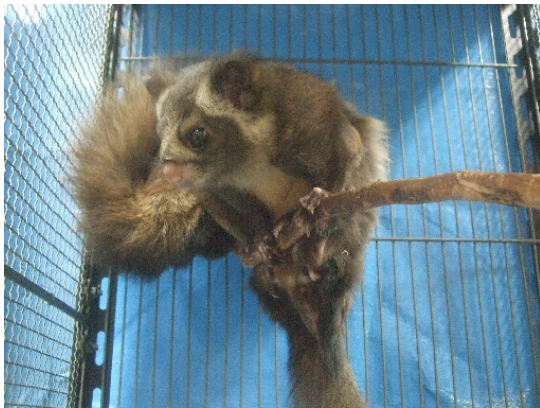
【傷病鳥獣の保護実績】

長野県より傷病鳥獣救護業務の委託を受けて、傷病鳥獣の救護受入を行っています。

過去にはスズメやカラスなど、身近な野鳥からチョウゲンボウなどの希少種まで、様々な種の受け入れをしていた時期もありましたが、2017年に県の保護対象種が明確化されたことにより、近年では受入件数は減少しております。

過去10年間に受入れた種は、鳥類ではヒヨドリ、ムクドリ、ヨタカ、トビ、ノスリ、ニホンキジ、キジバト、カルガモ、アマサギ、チュウサギ、アオサギ、アオバト、セグロセキレイ、トラツグミ、ヤマセミ、アカショウビン、マヒワ、ジュウイチ、アカエリヒレアシシギ、オオミズナキドリ、ウミネコ、ツバメ、ツミ、アオバズク、オオコノハズク、オオタカ、チョウゲンボウ、フクロウ、アカモズ、哺乳類ではイエコウモリ、タヌキ、ハクビシン、ムササビ、ニホンリス、ヤマネがあげられます。

放鳥放獣が困難な個体に関しては、動物園で終生飼育を行い、来園者への野生鳥獣の生死や救護の考え方についての普及啓発に、一役買ってくれています。また、中には動物園の飼育個体との繁殖に貢献したり、展示動物として活躍する個体もいます。



【ムササビ】



【カルガモ】

【課題とこれから】

収容施設が狭く、なかなか思うように保護活動が行えない実態があります。限られた環境の中で、なるべく放鳥放獣に結び付けられるように、職員の傷病鳥獣への対応を向上させる必要があります。

また、近年の鳥インフルエンザの流行により、保護受入が一時中断せざるを得ない状況にあります。その際の救護者への対応を、行政と連携を取りながら明瞭にする必要性を感じています。

野鳥の巣立ち時期には、多くの救護要請の連絡が入ります。動物愛護の精神は大切にしつつ、不必要な保護についての啓発を救護活動を通して行っていくことは、意義深いことと感じています。

また、令和6年度より、長野県の野生傷病鳥獣救護業務の委託の廃止が予定されています。今後も傷病鳥獣保護活動は続きますが、治療費・飼料代の予算の確保が運営面での課題となっています。

センカク系アホウドリの救護

放鳥's 境 貴 昭 / 吉 田 美 里

【救 護】

2023/9/6、日本野鳥の会大阪支部の支部長より、10日ほど前からアホウドリ（オキノタユウ）が泉南のりんくう公園マーブルビーチに上がっており、餌を採れていないようだ、救護が必要か確認してほしいとの連絡があり、確認に向かい夕暮れ近くに到着しました。

前日までは飛翔し、海上で水浴び等していたようですが、採餌している様子はなく、釣り人や野鳥の会大阪支部会員の数名で結成された見守隊から魚をもらっていたようです。私たちが到着した際、本鳥は見守隊に囲まれて座っており（写真①）、明らかに撥水の悪そうな見た目で、上背から肩羽付近の羽は何か擦れたかのような破損状態でした。時折羽ばたいたり、よたよたと歩いたりしていましたが、呼吸や消瘦の状態から救護が必要と判断しました。

なお、8/22 に大阪府貝塚市の近木川河口で観察されたのが最初ようです。保護地は夜中まで花火をしている人などが絶えない場所であり、貴重な鳥であることを知らずに近づく人がいないよう、救護直前は、見守隊が 24 時間体制で見守ってくださっていたようです。

翌日、朝一で中津動物病院へ搬送。診察内容等については、P.10 の中津先生のご報告をご参照ください。

診察後は、放鳥's のリハビリ施設で療養することとなりました。

【治療・リハビリテーション】

体調が安定するまでは 30℃の室内にて管理することとし、餌は当初は少量を頻回（3～4 回/日）に与え、食滞の有無、糞の状態等を注意深く観察しながら調整し、徐々に一度の給餌量を増やしていきました。体格やキールの状態から目標体重を 3.0～3.1 kg と設定し、体重と糞の状態から、与える餌の種類と量を調整しました。給餌は、十分量の自力採餌をしなかったため、強制給餌を主としました。その際、塩類腺の刺激のため人工海水に浸すほか、餌とは別に飲水用の水を強制で飲ませるなども必要に応じて行いました。また、海鳥救護は、バンブルフットや感染症対策が欠かせないことから、収容する場所の消毒、清掃、床材にも特に注意しました。

主に与えていた餌は右記の通りです。

しばらくは肩で呼吸したり、開口呼吸が見られたりと不安定な状態にあり、予定していた体各部の測定や羽毛洗浄などを延期することもありました。

救護から約 1 週間で飢餓状態を脱したため、1 回の給餌量を増やして回数は減らし、体重増加に努めました。また 9/15 からは、日中は屋外ケージに出し、水浴びをさせ撥水性の回復をこころみました。

しかしその後、鼻詰まりがあり、呼吸のたびに異音がするため、当グループの獣医師による診察を実施。聴診による肺の音には問題はなく、鼻詰まりは除去し、鼻が通っていることを確認しました。血液検査では肝臓（GOT）および尿酸値の数値が悪く、肝庇護剤を投与することとし、給餌量を急に増やしたことが原因と考えられたため、再び量を減らし様子を見ることにしましたが、その後、ペンギンの診察をしている動物園獣医師より、特に魚食性の鳥類では食後に尿酸値が急上昇することは通常であることと、成長期による肝臓数値（GOT）の上昇の可能性が指摘されました。ただし、同時に脱水による可能性も捨てきれないということで、水分を多くとらせるよう努めました。



写真① 救護直前のアホウドリ

【経 過】

- 9/6 りんくう公園マーブルビーチにて救護
- 9/7 中津動物病院に搬入、診察。
→滋賀の救護施設へ収容
- 9/12 飢餓状態を脱する
- 9/15 屋外ケージに出す(夜間は室内へ収容)
- 9/18 鼻詰まりと呼吸時の異音のため、
当グループ獣医師による診察
- 9/25 洗浄
- 9/29 伊豆大島付近の海上にて放鳥
- 10/2 千葉の海岸で発見される
- 10/3 再救護
- 10/5 落鳥

・アジ ・イワシ ・カマス
・メギス ・イカ ・サンマ
・エビ

さらに、撥水機能に回復が見られなかったことから、呼吸状態を確認しつつ、9/25に羽毛洗浄を行いました。(写真②, ③)



写真② 洗浄前



写真③ 洗浄後

その後のケージ内での様子は、軽快に歩き回ったり、羽ばたきを繰り返しており、体重も順調に増加したため、放鳥を検討することとなりました。(写真④)

なお、羽ばたくときは翼の端にものが当たらない位置まで移動したり、出入り口を把握しており、そこを執拗に確認したりと、アホウの名に反して、非常に賢い行動が見られました。(やはり改名した方が良いのでは!?)

大型プールを設置していましたが、ほぼ利用しなかったため、シャワーによる水浴びを頻回に実施しました。



写真④ 屋外ケージで羽ばたくアホウドリ

【放鳥場所の選択について】

山階鳥類研究所（以下、山階鳥研という）フェロー佐藤様より、放鳥場所について、以下の通りアドバイスを受けました。

- ・沿岸での放鳥は陸に戻ってきってしまうため、海上放鳥を強く勧める
- ・アホウドリは他の採餌中の他の海鳥を脅して吐き戻させ、奪い取って食べる行動が多く見られるため、アホウドリ類・オオミズナギドリ類の採餌エリア海域（なるべく沖合）が望ましい
- ・放鳥海域については、この時期のアホウドリ類の分布海域を推定すれば、伊豆諸島から千葉県・茨城県沖がベストである（中部・近畿太平洋エリアには分布しない）

【放 鳥】

アホウドリの状態からベストの放鳥時期に合わせ、知人のつてを頼り、千葉県の勝浦港から 9/30 に出港する海鳥観察のための漁船を確保していただきましたが、当日の海況が悪く出港できない可能性があるとのことで、急遽、山階鳥研の方に海況の良い9/29に、伊豆下田港出港の漁船をご準備いただきました。

この海域でアホウドリ類が見られるのはもう少し先（10 月半ば）とのことでしたが、餌を奪う相手（オオミズナギドリ）がおり、また潮の流れからもよりよいえさ場へと流れていくだろうと予想されました。

放鳥当日、乗船前に山階鳥研の佐藤様、同研究員の富田様より、環境省のリングおよびカラーリングの装着、および体各部の測定を実施していただきました。（測定値等に関しては後述します。）

6:25 頃、下田港よりチャーター漁船にて出港し、7:43、伊豆大島と利島の間付近の黒潮を越えたオオミズナギドリ類の群れる海上（図 1）にて放鳥。放鳥時の体重は約 2.9 kg でした。山階鳥研のスタッフとともに 10 分ほど様子を見て、飛翔や撥水、喫水線、行動に問題ないことを確認し、船が近づくと逃げるようになったため、観察を終了としました。(写真⑤, ⑥)

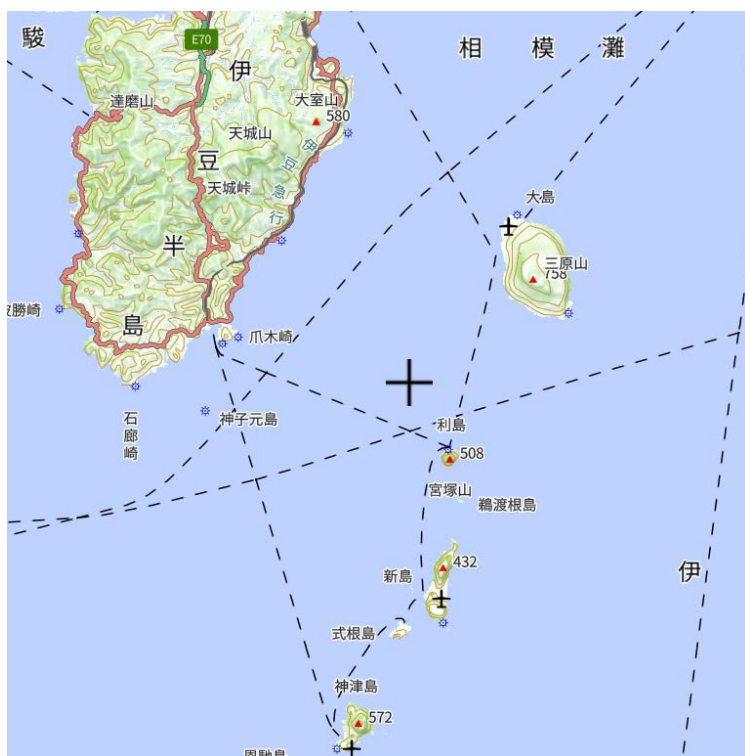
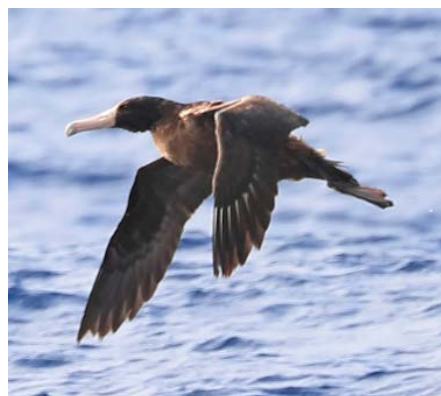


図1：放鳥場所（出典：国土地理院）



写真⑤ 放鳥直後、飛翔



写真⑥ 放鳥直後、着水

【流跡線解析】

治療およびリハビリが適正であったかどうかを知るには、放鳥後の生存確認が必須となるため、目撃情報収集の確率を上げる目的で、気象予報士である太田佳似様に、気象解析（HYSPLIT による前方解析）により、放鳥日時と放鳥場所からアホウドリが移動する可能性の高い経路を2パターン予測していただきました。（図2、3）

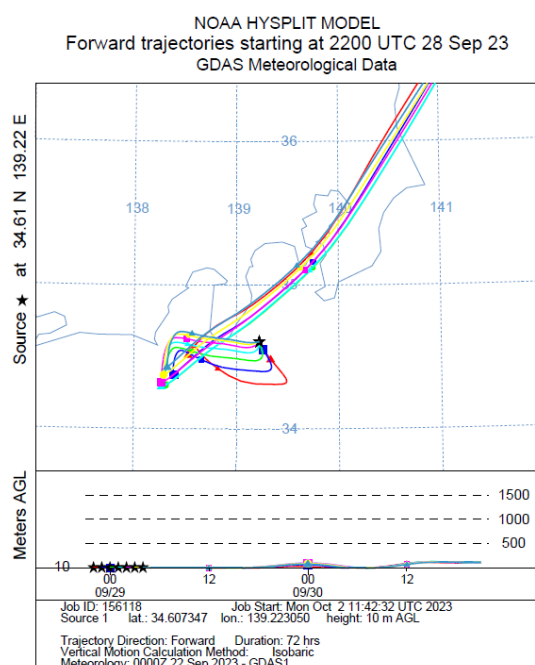


図2：パターン①

放鳥してすぐ（5 時間以内）に移動し始め、風に乗った場合、寒冷前線前面の南西風で北東に流れて行く。

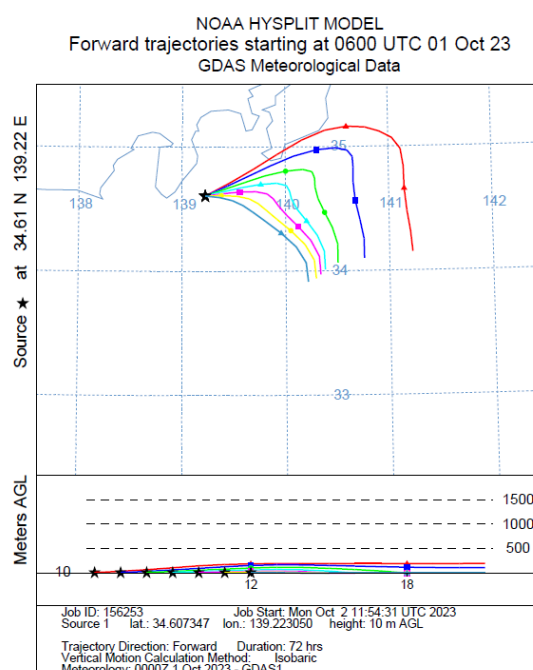


図3：パターン②

寒冷前線の通過(10/1、21:00 頃)を待つて風に乗ると（渡り鳥でよくある行動）、この図の灰色の線(左端)のようになり、より早く出発すると赤い線(右端)の方にずれる。

【再保護】

残念ながら、放鳥からわずか5日目の10/3に再保護となりました。前日の10/2に千葉県いすみ市の海岸で発見されており、飛べないようだとの情報が入ったようです。そして、現地の救護施設のスタッフが保護収容しました。放鳥場所からは直線距離で約125km。上述のパターン②赤線(右端)の移動経路と一致しました。

再保護の連絡を受け、すぐに当グループで再度救護に当たらせてほしい旨、行政および現地救護施設へ打診しましたが難航。そうこうしているうちに再救護から二日目で死亡してしまいました。

<再保護時の状況(※千葉県の救護施設より情報提供いただきました)>

- 10/3
- ・砂浜に座っており、近づくとは歩いて遠ざかっていたが、簡単に捕獲できた。
 - ・体重は2400g。
 - ・目立った外傷はないが、羽毛の乱れ、若干呼吸の荒いときがあった。
 - ・プール付きの一番大きい部屋に収容。
 - ・自らプールに入り、同ケージの他の鳥が驚くほど水浴び。撥水は完ぺきではないものの悪くはなかった。
 - ・クリティカルリキッド200mlを2回投与、皮下補液。
 - ・夜間は保温。
- 10/4
- ・朝、吐き戻している。
 - ・昼間はプール付きの部屋で自由にさせているが、特に異常なし。
 - ・クリティカルリキッド200mlを2回投与。
 - ・夜間は狭い部屋に移動させ保温。
- 10/5
- ・朝、死亡を確認。
 - ・前日のリキッドを吐き戻している。
 - ・山階鳥研へ引き渡し、博物館獣医師(哺乳類専門)により解剖。

【種・齢判定・体各部の測定】

- ・山階鳥研のスタッフにより22ヶ所の測定を実施。鳥島の個体と比べてかなり小柄で、測定値からもセンカク系アホウドリの可能性が極めて高い。
- ・種判定はDNA解析により確定となる。当グループの依頼先では、送付ミスにより血液の状態が悪く、種判定できない可能性があったため、山階鳥研経由で北大にも解析を依頼。
→当グループの依頼先でも無事解析ができ、センカク系と判定。北大の結果も同様にセンカク系と判定。
- ・2～3年目の個体。
- ・水かきにダニの吸血跡がないことから、繁殖経験のないことがわかる。(上陸し、長期間地上にて抱卵しているとダニに吸血される。)
- ・センカク系アホウドリの体重は3.5kg～4.5kgで、鳥島系よりも平均1kgは軽い。さらにこの齢の標準体重は成鳥よりも軽く、3kgを超える程度と推定された。

【解剖結果】

- ・目視での顕著な死因は不明。
- ・肺の一部に小さな白点あり。一部組織を病理に提出。→現時点で結果得られず
- ・未発達の卵巣があり♀と判明。
- ・解剖時の写真の提供依頼をしているが、現時点で未入手。

センカク系アホウドリは推定500羽と非常に希少であり、今回救護を成功させることができず、非常に残念な結果となりました。

現時点で死亡原因は不明ですが、放鳥時、目標体重の3.0～3.1kgにわずかながら到達していなかったことや、肩羽の破損など、いくつかの気になる点があります。しかしながら海鳥の長期飼育はリスクも高く、放鳥判断の難しさを感じています。また肺の白点の病理結果や、解剖医が哺乳類専門家だったため、解剖写真を鳥類専門の法獣医に確認いただくことで新たな見解を得られる可能性もあり、原因究明と今後の救護技術の向上に努めたいと思います。

今回の救護において、多くの方に助言やご協力を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げます。

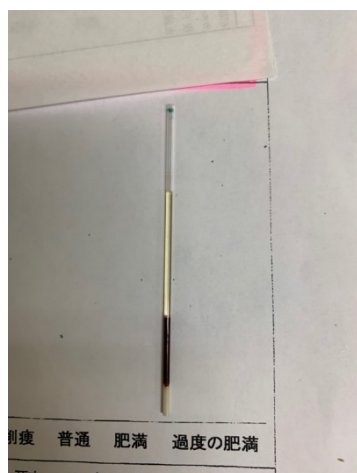
アホウドリ (オキノタユウ) 救護報告

WRV副会長・大阪支部長 中 津 賞

2023年9月7日に、アホウドリ (オキノタユウ *Diomedea albatrus*) が“放鳥‘s’”から搬入された。この鳥は前日の9月6日に、泉南郡田尻町、りんくう公園のマーブルビーチで保護された。背景には、8月22日に発生した台風8号による強風の影響があるかも知れない。また脚環は装着されてなかった。

体重は2.2kgで、キールスコア (keel score) は2を示し、大胸筋はあまり発達していない。これは飢餓、あるいは必要量の餌が採れていなかった期間がある程度長いことを示している。腹部の容積はやや大きかったが、腹水や臓器の腫大等は触知されなかった。レントゲン写真では、小腸に小さな金属片がある。しかし胸部食道／筋胃／小腸等の消化管や、腎臓／腹部内臓の位置関係は正常であった。消化管のガス像は見られない。胸部食道内には、魚の小さな骨と推定されるものが数本認められる。これは、救護後に与えられたものかも知れない。心臓は小さく、肥大等がないところから、機能的には正常と診た。肺の紋理は綺麗に整っていて、肺炎像はなかった。翼下静脈から採血した。その結果を写真1に示した。

赤血球数 202 万/mm³、Ht29.8%、Hb12.7g/dl、MCV147.6 と大球性の赤血球を持ち、MCH63.1 で、赤血球は高色素性であることが判明した。総タンパク質量 (TP) は 5.4g/dl、血糖値は 306mg/dl と良好な数値を示した。



検査項目	検査結果	正常範囲
RBC	202万 個/μl	250万~370万
Ht	29.8 %	42.4~53.7
HGB	12.7 g/dl	11.1~13.99
WBC	5250 個/μl	14000~24000
総球数	1.8 万個/μl	20000~30000
GLU	306 mg/dl	127~319
GOT	154 U/l	12~73
GGT	5 U/l	1~10
LDH	U/l	120~246
NH ₃	76 μg/dl	~120
TBA	μmol/l	
UA	5.9 mg/dl	2.0~12
CPK	992 U/l	165~378
TCHO	263 mg/dl	104~244
TG	63 mg/dl	150~250
ALP	397 U/l	100~200
TP	5.4 g/dl	3.5~5.5
AMYL	1070 U/l	
LIP	31 U/l	
Ca	11.2 mg/dl	8.7~12.7
P	4.4 mg/dl	2~4.5
Na	157 mmol/l	130~155
K	3.7 mmol/l	3.0~4.5
Cl	12.1 mmol/l	
Tbil	0.7 mg/dl	1.0以下

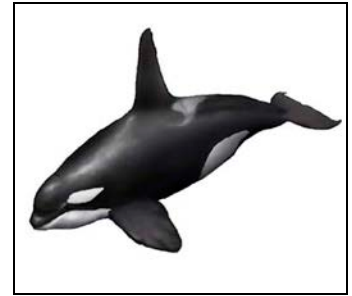
写真1



アスペルギルス感染を予防するために救護初日から、ビクタス 10mg、イトラコナゾール 7 mg/kg をそれぞれ 1 日 1 回、7 日間経口投与した。

閉経する鯨類・シャチ

シャチと言えば、マイルカ科に分類されている仲間では最大の種で、体長は通常5～7m、時に9mを超える大きさに成長し、サメを含めた様々な魚種からペンギン、アシカやアザラシ等の海獣類、そして同類である鯨類に至るまで集団的なハンティングによって捕食し、言わば海洋生態系の頂点にいる哺乳類として誰もが知るところである。一方で、水族館で飼育下にある個体などは、訓練によって様々な芸を披露し、他のイルカ類やアシカなどとともに人気を呼んできたことも事実である。



北海道を中心に、日本近海においても時折観察されることがあるが、個体群により生息域は多様で、その分布は地球レベルで広範に渡っている。また、体色等の形態的な違いや食性や生態の違いにより、異なったタイプのもを別種として扱うべきという意見も一部の専門家から提唱されている。

こうした特徴を持つ種であるが、シャチにはさらに特異な性質がある。それは、メスに「閉経」があるということである。つまり、多少の個体差はあるものの、40歳を超えたあたりから子供を産めなくなる。人には同様に女性に閉経があるのであまり不思議に思われないかもしれないが、実は哺乳類で閉経が確認されているのは、人以外では今のところ数種のハクジラ類のみなのである。

ではなぜシャチには閉経があるのか。英国のエセクター大学やヨーク大学等を中心とする研究者たちのこれまでの研究成果によると、メスのシャチは閉経後30～40年も生きるが、基本的に母系集団を形成するシャチの社会において、年寄りのメスが餌の確保や子供たちを守る役割を果たすことにより、特に孫の世代の生存率が大きく伸びるようなのである。一方で自らの子供のうち、特にオスの個体を特別扱いし、餌を頻繁に与えたりある種の保護行動を取ったりすることも確認されており、メスに比べて寿命が短く、しかも別の群れと交尾行動を行うオスを庇護することにより、自らの遺伝子をより次世代に伝えられる可能性を上げているといった説も唱えられている。

今後の研究により、さらに新たな知見が得られていくことが期待される場所であるが、シャチの閉経に纏わる生態的特徴は、人との共通性といった観点からも大変興味深いものがある。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)

【 事務局より寄付のお礼 】 寄付ご協力者(敬称略) (令和5年9月1日から令和5年11月30日)

○神奈川支部 2023.9.23 動物愛護フェアかわさき 2,415 円

2023.10.8 金沢動物園 Zoo To Wild Fes Autumn 700 円 2023.11.12 秋の動物園まつり 1,400 円

事務局日誌 2023.9.18～2023.12.15

=== 9 月 ===

19：厚木市立玉川小学校2年生の学習指導 [神奈川支部]

対応：皆川

22～24：第29回日本野生動物医学会大会（鹿児島大学）

対応：羽山、加藤、玉井、隅田

23：動物愛護フェアかわさき（川崎市・アニメモール） [神奈川支部]

対応：皆川

24,28：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]

対応：皆川

25：環境省水鳥救護研修センター・運営協議会

出席：新妻、箕輪、二階堂

25：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習（講義）

対応：皆川

27：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習（水鳥救護研修センター）

対応：皆川、箕輪、二階堂

30：東京学芸大学付属小金井中学校常任幹事会（東京学芸大学付属小学校）

出席：新妻

30：麻生区ふれあい公園まつり（川崎市・王禅寺公園）

対応：皆川

30：WRV ニュースレターNo.126 発行

対応：小松、箕輪、二階堂

=== 10 月 ===

01：稲城市健康まつり（稲城市オーエンス健康プラザ）

対応：小松

03,31：令和5年度山梨県アライグマ捕獲従事者養成講習会（山梨県・防災新館）

対応：加藤

05：令和5年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」関係三団体合同報告会（Web 会議）

対応：箕輪

05,12,22,29：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]

対応：皆川

06: 令和5年度東京都アライグマ・ハクビシン対策講習会(東京都・長沢倶楽部)	対応: 加藤
08: 金沢動物園 Zoo To Wild Fes Autumn (横浜市立金沢動物園) [神奈川支部]	対応: 皆川
16: 第3回東京都獣医師会理事会(東京都獣医師会会議室)	出席: 小松、中川、高橋
17: 東京大学・WOAH 公開シンポジウム「農場における動物用医薬品の情報収集—電子処方システムの構築を目指して—」	出席: 小山
21: 国際法獣医学シンポジウム(北海道大学・オンライン併用)	対応: 小山
23: 2023 動物感謝デー in Japan (上野恩賜公園: 資料配布)	対応: 箕輪
23~24: 第1回油等汚染事故対策水鳥救護研修(水鳥救護研修センター)	対応: 新妻、中津、皆川、石原、箕輪、二階堂
25: JICA「海外保安実務者のための救護・環境防災研修」(水鳥救護研修センター)	対応: 中津、皆川、石原、箕輪、二階堂
28: (NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川支部]	対応: 皆川
28: 大牟田市動物園・YouTube 講演「野生鳥類からのメッセージを読み解いて数十年」(講師: 齊藤慶輔先生、渡邊有希子先生)	対応: 箕輪
=== 11月 ===	
01: 令和5年度前橋市鳥獣被害対策実施隊研修(群馬県・大胡公民館)	対応: 加藤
03: ふじさわ環境フェア(藤沢市民会館・前庭) [神奈川支部]	対応: 皆川
05: 獨協高等学校同期会(上野精養軒)	出席: 新妻
05: 令和5年度稲城市防災訓練(向陽台小学校)	対応: 小松
05,16,26: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応: 皆川
09~10: 第2回油等汚染事故対策水鳥救護研修(水鳥救護研修センター)	対応: 新妻、加藤、皆川、御厨、藤平、箕輪、二階堂
12: 秋の動物園まつり(川崎市夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部]	対応: 皆川、箕輪
12: チームアライグマ2023年 第7回高校生によるシンポジウム「生物多様性における外来種の立場を考える」(埼玉県立川越女子高)	対応: 加藤
14: 練馬西税務署長より「税務獣医師支部長功績表彰状」授与(練馬区・石神井交流センター)	受賞: 新妻
16: 令和5年度アライグマセミナー(千葉県立中央博物館)	講師: 加藤
17: 令和5年度第1回東松山市環境審議会(東松山市役所)	出席: 小山
18: 長浜公園感謝 DAY(横浜市長浜公園) [神奈川支部]	対応: 皆川
18~19: 第44回動物臨床医学会年次大会(大阪国際会議場)	対応: 田向
18: 北海道地区会議学術講演会「人間と野生生物の共生のために—北海道の最新研究と実践—」(北海道大学・オンライン併用)	対応: 小山
19: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(講義: 県民活動サポートセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川、加藤
29: 公開理論研究会「アニマルカフェの研究」(オンライン)	対応: 皆川
=== 12月 ===	
01: 帝京科学大学「野生動物と展示動物の福祉」講座(千住キャンパス)	講師: 箕輪
01~03: 第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会(神戸国際会議場)	対応: 新妻
02~03: 「野生生物と社会」学会・第28回つくば大会(筑波大学)	対応: 小山
03: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(講義: 県民活動サポートセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川、金坂、箕輪
06: 令和5年度第2回東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン) 防除対策作業部会(Web会議)	対応: 加藤
07: 愛鳥懇話会(日比谷松本楼)	出席: 新妻、箕輪
08: 東京都獣医師会中間監査会(東京都獣医師会会議室)	対応: 小松、中川、高橋
08: 令和6年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」後援名義申請書提出(環境省)	対応: 箕輪
09: 公開シンポジウム「法獣医学を解く」(オンライン)	対応: 小山、箕輪
10,16,17: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応: 皆川
13~14: 第3回油等汚染事故対策水鳥救護研修(水鳥救護研修センター)	対応: 新妻、加藤、皆川、御厨、藤平、箕輪、二階堂
15~17: パードリサーチ鳥類学大会2023(オンライン)	対応: 小山

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 127 2023.12.25 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302 TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 新妻 勲夫 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪多津男